

2014年3月4日

審査委員長 樋口隆一

表記の博士学位審査請求に関し、審査委員会では論文審査及び口述試験を行った結果、全員一致で合格と判定しましたので、ここにご報告します。

請求者氏名 手代木俊一

論文名 明治と讃美歌 明治期プロテスタント讃美歌・聖歌の諸相

The Meiji Era and Hymns:

Aspects of Protestant Christian Hymns in the Meiji Era

審査委員会

委員長 樋口隆一（文学部教授）

委員 岡部真一郎（文学部教授）

委員 古川柳子（文学部教授）

I 審査内容

1. 論文の趣旨と内容

手代木俊一の論文博士学位請求論文「明治と讃美歌 明治期プロテスタント讃美歌・聖歌の諸相」は、A4版162頁（本文119頁、註43頁）の論文である。形式面では論文博士学位論文としての体裁が十分に整えられている。そこで、以下では内容面の検討に入る。

本論文は、明治期におけるプロテスタント讃美歌・聖歌の成立と、それが当時の日本の社会と文化に及ぼした影響を論じたものであり、讃美歌研究の開拓者であり第一人者である手代木氏ならではの示唆に富んだ研究となっている。同氏はすでに、『讃美歌・聖歌と日本の近代』（音楽之友社、1999年、490頁）、『日本プロテスタント讃美歌・聖歌史事典 明治編』（港の人、2008年、306頁）という労作を発表しており、本論文はこれらの書誌学的研究に基づきながら、明治の讃美歌を文化的観点から見直したものであり、その意味でこれは同氏の明治期讃美歌研究の集大成ともいえる。

本論文の目次は次の通りである。

まえがき	2頁
凡例	4頁
目次	5頁

序章 勝海舟と讃美歌 時代は蘭学から英学へ	6 頁
第1章 ゴーブルと讃美歌 英語讃美歌から日本語讃美歌へ	21 頁
第2章 C. M. ウィリアムズと讃美歌 最初の讃美歌の成立と他教派との協力関係	32 頁
第3章 来日宣教師の社会事業（盲人教育）と讃美歌	53 頁
第4章 日本の讃美歌、唱歌、及び替歌（南北戦争の歌）と 19 世紀アメリカの海外宣教	68 頁
第5章 植村正久と讃美歌 日本人最初の讃美歌論と『新撰讃美歌』	98 頁
第6章 島崎藤村、樋口一葉と讃美歌 キリスト教と詩歌 86 調と 75 調	106 頁
注	125 頁

2. 論文の概要

序章「勝海舟と讃美歌 時代は蘭学から英学へ」では、明治期の前史である江戸時代、オランダ語から訳された讃美歌について触れ、日本が蘭学から英学へ推移する中、勝海舟が翻訳するに際し、なぜ漢詩風ではなく、75 調に訳したか、そして勝海舟とキリスト教との関係を検証している。

第1章「ゴーブルと讃美歌 英語讃美歌から日本語讃美歌へ」では、記録に残る最初の日本語讃美歌について言及している。最初の日本語讃美歌とは、ゴーブル、クロスビー、C. M. ウィリアムズの翻訳讃美歌であるが、ここではゴーブルを中心に扱っている。ここで問題となったのは、宣教師のアジアにおけるネットワーク、75 調、ヨナ抜き 5 音階、頭韻脚韻の扱い方である。

第2章「C. M. ウィリアムズと讃美歌 最初の讃美歌の成立と他教派との協力関係」では、C. M. ウィリアムズが翻訳した讃美歌から他教派との協力関係を想定している。

第3章「来日宣教師の社会事業（盲人教育）と讃美歌」では来日宣教師と社会事業、特に讃美歌と盲人教育の関係を扱っている。

第4章「日本の讃美歌、唱歌、及び替歌（南北戦争の歌）と 19 世紀アメリカの海外宣教」では、日本の近代音楽、特に唱歌と讃美歌を 19 世紀アメリカの海外宣教と音楽を中心に論じ、替歌と讃美歌との関連にも触れている。

第5章「植村正久と讃美歌 日本人最初の讃美歌論と『新撰讃美歌』」では、明治の讃美歌史においては、5 教派統合の明治 36 年版『讃美歌』へと各教派の讃美歌が収斂していく過程が中心であるが、その中で明治 21（1888）年『新撰讃美歌』に関した植村正久と彼の讃美歌論を紹介し、その後の讃美歌（集）にどのような影響を与えたのかを論述している。

第6章「島崎藤村、樋口一葉と讃美歌 キリスト教と詩歌 86 調と 75 調」では、島崎藤村、樋口一葉の詩歌と讃美歌との関わり、讃美歌から受けた影響を扱い、彼らとキリスト教の関係、さらに彼らの詩作の実際において生じた 86 調と 75 調の問題を具体的に論じている。

3. 論文の評価

手代木俊一氏はすでに、『讃美歌・聖歌と日本の近代』（1999年）において、「年表・日本の主要讃美歌聖歌」、「日本の讃美歌・聖歌目録（プロテスタント教会系）」を作成し、さらに『日本プロテスタント讃美歌・聖歌史事典』（2008年）においては、明治期の讃美歌、讃美歌集を、教派別に、時系列に従って網羅的にまとめられている。

本論文ではこれらの基礎研究に基づき、讃美歌を翻訳した宣教師はどのようなネットワークを持っていたのか、そのことが訳語にどのように反映したのか、また他教派との間にどのような協力関係が生まれたのか、その讃美歌は礼拝以外でどのような働きをしたのか、そして日本の音楽、詩歌にどのような影響を与えたのかを明らかにされている。『日本プロテスタント讃美歌・聖歌史事典』が歴史的叙述である縦軸であるとするれば、この『明治と讃美歌』は讃美歌と日本文化との出会いから生まれた教派を越えた諸問題、宣教師間協力等の横の関係を扱う横軸をなしている。前作が讃美歌、讃美歌集の歴史であるとするれば、本論文では、讃美歌をとおして明治期の日本の言語、音楽、文化、社会を描き、同時に日本の近代化における讃美歌の役割についての考察を試みている。手代木氏はまた、本論文の執筆と並行して、『日本讃美歌・聖歌 研究書誌 2010』という歴大な書誌学的労作もまとめられているが、本論の考察を可能とした背景には、こうした仕事から得られる先行研究への網羅的な知識がある。本論文に付された歴大な註を読むと、同氏の考察の道筋が明らかとなる。

手代木氏は、これらの基礎的な仕事を通してわが国の讃美歌研究を開拓してこられた。本論文は明治期讃美歌研究のひとつの集大成であり、それがヘボン塾以来、日本の讃美歌の成立において中心的役割を担ってきた明治学院への博士論文として提出されたことにもまた歴史的意義がある。同氏の研究がさらに大正、昭和の讃美歌と日本の社会や文化との関係への考察へと発展することを願うものである。

II 審査結果

2013年9月26日に提出された本論文の審査にあたっては、3名からなる審査委員会が結成され、慎重に審査を行った。口述試験は2014年2月18日に行われた。論文の画期的内容は認められたが、広範な註はあるものの、独立した参考文献表が付加されることが望ましいとの意見があったため、その追加を条件に全員一致で口述試験の合格を認めた。

以上の経過を経て、審査委員会は手代木俊一氏の博士学位請求に関し、表記の通り。全一致で合格という結論に達した。